

現代の家庭における子どもの食行動と伝統的食習慣についての研究

川合 貞子・武石 仁美・福田 啓子・村木由紀子

(昭和61年9月30日受理)

Study on Present-day Children's Behavior of Eating at Home Compared with the old Japanese Custom of Eating

Teiko KAWAI, Hitomi TAKEISHI, Keiko FUKUDA and Yukiko MURAKI

(Received September 30, 1986)

はじめに

食文化という観点から、“人間は料理をする動物、共食をする動物”と言われ、この二つの人間的特徴が“食べる”ということに関して安定した状態を作りあげ、そこに食に関するマナーや、食をめぐる価値を含んだ社会的、精神的側面を持つ文化が生まれたと考えられる。この食文化を規定する要因は、資源、生産様式などの物質的要因と、居住、家族形態、共同体意識、宗教的禁忌などの非物質的要因があるが、それらの歴史的变化の中で、食形態、食法も大きな影響を受けてきた。同時に、食作法としての幼少時からの躰や、共同体ないしは社会集団における生活様式としての食習慣に関する意味や方法も変容せざるをえない。食することは、単に生理的欲求を満すのみならず、精神的、文化的、社会的価値と根底からかわる事柄である。このような意識的背景のもとに、食に関する現代的な諸問題や、子どもの心身共に文化的で健康な育成の保障を考える手掛りの一端として、母親を対象とした子どもの食生活についての実態調査を行った。本研究では、社会化への導入となる躰を主とした食行動と食習慣について、調査対象とした三地域を比較検討する。

なお、我々は本学家政学部生活科学研究所に於ける総合研究プロジェクト「子どもの食生活と躰についての総合的研究」のメンバーとして研究を続けてきた。本研究はそれらと一連のつながりをもった研究であり、当紀要「現代の家庭における食形態について」(千田他)と同一の質問紙調査のうち、食行動と食習慣の領域について報告するものである。

児童学科・保育科

I 調査方法

目的：現代における食生活と躰についての実態を把握するため、「農村」「地方都市」「大都市」と考えられる各地域から一地区を選択し、結果を検討する。

対象地域及び対象者：①、埼玉県秩父郡小鹿野町（農村として選択。以下O地区とする。）の小鹿野、三田川幼稚園4、5才児の母親219名、②、埼玉県秩父市（地方都市として選択。以下C地区とする。）の秩父幼稚園3、4、5才児の母親122名、③、東京都板橋区高島平近辺（大都市として選択。以下T地区とする。）の大東文化附属幼稚園、まるやま幼稚園4、5才児の母親124名、合計465名。

手続き・方法：園児の母親を対象にアンケート調査を行った。調査期間は、O及びC地区が昭和59年11月21日～11月30日、T地区が同年12月1日～12月10日である。

質問項目：食行動についての主な内容は、食事の所要時間、手伝い、食事の際の留意事項、食物の好嫌、躰の主体者等。伝統的食習慣については行事食とその意味、および由来、神棚や仏壇について、供物と手伝い、食にまつわる故事等である。

なお、調査方法の詳細および調査地域の基本的属性については、前述の千田他の報告を参照していただきたい。

II 結果と考察

1. 食行動

ここでは、食行動について、食事の所要時間、準備やあと片づけの手伝い、食事の際の注意事項、好き嫌い、箸の持ち方、躰の程度とその主体者などから検討する。

図1、2（図中「その他」「無答」は省略。以下同様）

は、子どもの朝食と夕食の所要時間を示したものである。全体的にみると、朝食では3地区とも「15～30分」あるいは「10～15分」の回答がほとんどを占めるのに対し、夕食では「10～15分」は非常に少なくなり「30～60分」が多くなっている。地区別にみると、夕食において、その所要時間に違いがみられるのが特徴である。例えば、O地区（小鹿野町）の場合、「15～30分」が63.5%、「30～60分」が19.6%となっているが、T地区（高島平付近）では「30～60分」が半数以上の58.1%、「15～30分」が31.5%と対象的な値を示しており、T地区の方が時間をかけて食事がされていることがわかる。これは、O地区に比較してT地区の方が母親の就業率が低い（O地区43.8%、C地区32.0%、T地区17.0%）こととも関連があるように思われる。

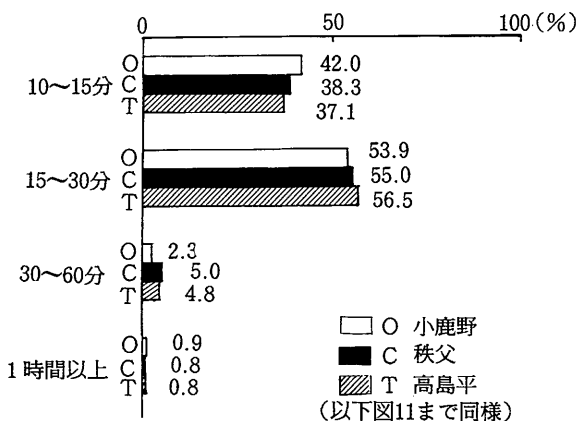


図1 朝食の所要時間

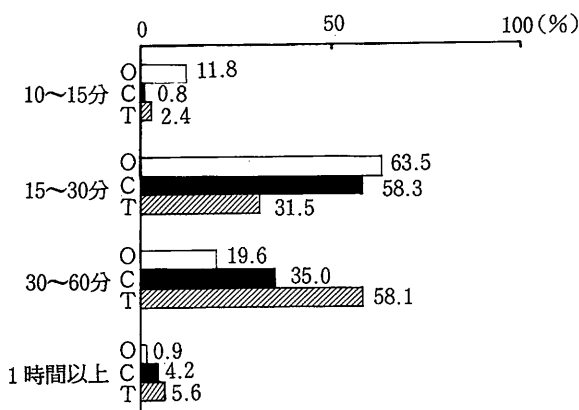


図2 夕食の所要時間

食事の用意では、「食器を並べる」(O地区50.7%、C地区60.3%、T地区57.3%)、あと片づけでは、「自分の食器だけ運ばせる」(O地区37.9%、C地区55.8%、T地区39.5%)といった程度の手伝いをさせている家庭が多くみられる。しかし、どちらも「ほとんどさせない」が30%前後を占め、幼児の手伝いについては、それほど関心が向けられていないともいえるだろう。地区別に比較してみると、C地区（秩父市）では、用意、あと片づけとも手伝わせている割合が高いこと、「ほとんどさせない」が低いことがわかり、他地区よりやや積極的な姿勢がみられる。

図3は、食事の前後、特に留意する事項を示したものである。全体的にみると、大部分の家庭で指摘しているのが、「あいさつ（いただきます、ごちそうさま等の唱和やお祈り）をさせる」であり、次に「手を洗う」「毎食後歯をみがかせる」といった子どもの衛生や健康面を考えての内容があげられる。さらに「朝食の前に着がえさせる」「朝食の前に顔を洗わせる」などの一日の始まりにけじめをつけるという意味も含まれた内容と続いている。「家族全員そろってから食べさせる」は、比較的少ないが、食事の際、父親の不在などが推察される。また、あいさつをさせる理由については、「習慣として」が最も多くあげられ、O地区82.3%、C地区65.1%、T地区73.4%となる。「両親や作物を作ってくれた人達に感謝する」は、O地区15.0%、C地区24.8%、T地区25.7%となり、「神、仏に感謝する」はわずかO地区2.0%、C地区5.5%、T地区3.7%となる。あいさつという行為を躰の一環としてとらえてはいるが、毎日の習慣として行なわれていることが多く、特別な意味づけはされていないといえよう。地区別にみると、各内容に多少の差がみられることがわかり、C地区では「朝食の前に着がえさせる」ことが、あいさつをさせるの90.8%に続いて66.7%とかなり高い値を占め、逆に、T地区では「朝食の前に顔を洗わせる」「着がえさせる」「歯をみがかせる」ことより、「手を洗う」ことが66.1%と高くなる。すなわち、C地区においては、「あいさつ」の高いこと、その理由の値をみてもわかるように、感謝する気持ちやきちんとした心構えで食事につくという意図が、他地区に比べて強いということがうかがわれる。

図4は、食事の最中、特に留意する事柄を示したものである。全体的には、「ひじについて食べない」「姿勢正しく座わる」といった子どもの姿勢についてや、「好き

子どもの食行動と食習慣

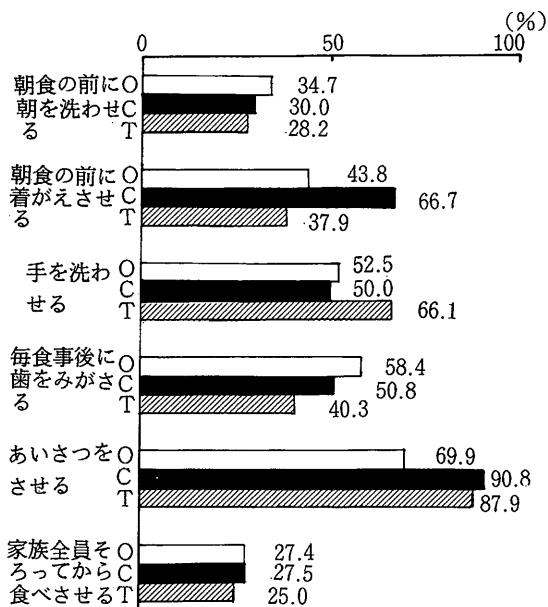


図3 食事前後の留意事項

嫌いを言わない」「残さない」など、食べ物を大切にすると同時に、子どもの体力の向上といったことに注意が向けられていることがわかる。「大きな声で話をしない」「キョロキョロわき見をしない」などは比較的少なく、食事中は静かにきちんと食べるということより楽しくおしゃべりしながら食事がされていることがうかがわれる。特に、T地区では食事にかかる時間が長いことと(図2)、「大きな声で話さない」がわずかに3.2%であることなどから、食事を家族とのコミュニケーションの場として、より強くとらえていることがうかがわれる。「寝ころばない」「箸をごはんに立てない」といった迷信的内容は、全体的には決して多いとはいえないが、地区別にみると、O地区が他の地区よりその割合が高いことがわかり、農村地方では古くからの伝承的意義を今でも尊重していると思われる。また、図中の項目中、「好き嫌いを言わない」が多くあげられているが、「子どもの好き嫌い」の調査結果においても、「ある」と答えた家庭が、O地区61.2%、C地区60.8%、T地区68.5%と高い値を占めていることがわかる。さらに、その種類が野菜類に集中されていることとあわせ考えてみると、子どもの偏食を治し、じょうぶな身体や健康面を重視した内容が、現在の躰の重要なポイントとなっていることが推察される。そして、好き嫌いの対応策としては、図5に示す通りであるが、ここでは、注意したり、少しでも食べ

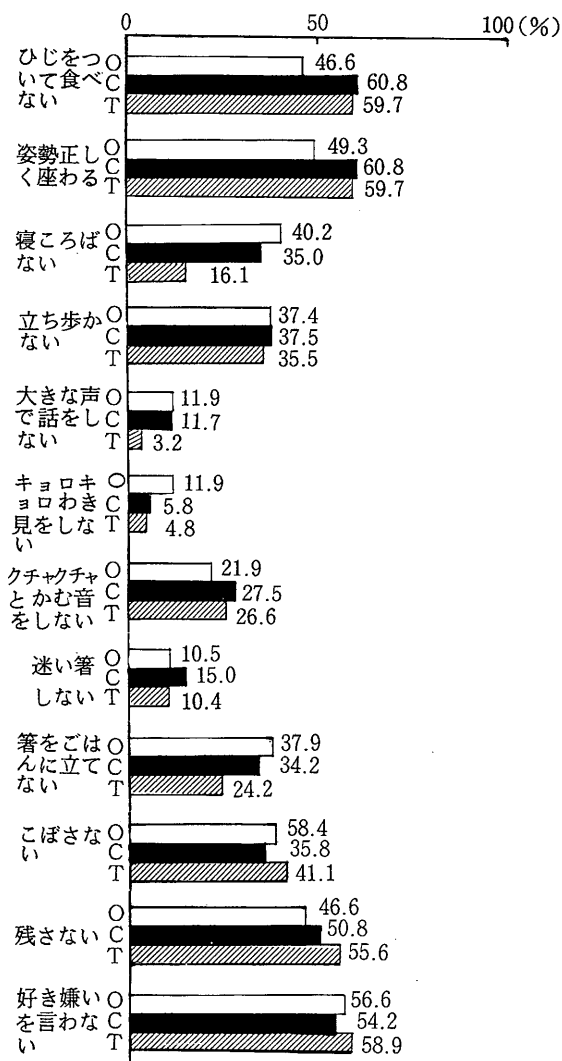


図4 食事中の留意点

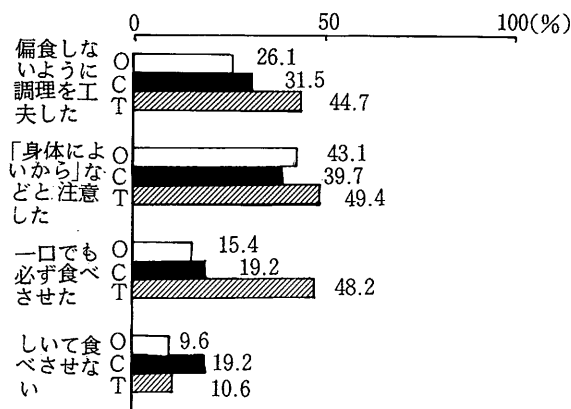


図5 好き嫌いの対応策

させたり、調理を工夫したりと何らかの方法がなされている。特に、T地区では、その割合が高く、他の地域と比較して、親の努力が強くみられる。

食事の躰の一環として、「食事中、テレビをつけているか」の質問に対しては、「はい」がO地区49.3%、C地区50.0%、T地区47.6%、「いいえ」がO地区48.4%、C地区48.3%、T地区49.2%とほぼ同数であり、テレビをみながらの食事が一般的になっていることを示唆している。

次に、食事の際、食べ物に対しての注意を示したのが図6～10である。まず、「床や畳」(図6)、「食卓の上」(図7)、「口のまわりや衣服」(図8)、などに食べ物をこぼした場合は、「ひろわせる」「注意をする」の2つの回答に集中し、「食べさせる」は、比較的少ないことがわかる。特に、床や畳にこぼした時は、衛生面を考えてか、「食べさせる」ことは、ほんのわずかである。地区別にみると、T地区では、「注意すること」より「ひろわせる」といった行動的な面がみられ、O地区では、食卓の上、あるいは衣服にこぼした時に、「食べさせる」ことが多く、「ひろわせる」ことが少ないのが特徴といえる。「食べ残した時」(図9)では、「注意する(食べたかは不明)」が多く、無理に子どもに食べさせることは少ない。「好物が出され、その量に不満を言った時」(図10)でも、やはり、「注意する、納得させる」ことが多い。現在は、食に関しての物質の豊富さに伴い、食べることの大切さより、子どもの衛生や健康といったことが重視されている。そして、その方法も子どもに対して強制的におしつけたりせず、ことばで注意納得させることが主として行なわれていることがわかる。しかし、T地区では、他地区に比べて親の積極的な行動がみられるものの、図9、10のように、食べ残しは「無理に食べさせない」、量に不満な時は「あげる」が比較的多くみられることは子どもの要求を安易に満たしてしまう傾向がみられ、将来のわがままや過保護につながる危険性をもっていることも予測される。

食物の好き嫌いについては、O地区61.2%、C地区60.8%、T地区68.5%が嫌いな食物があると回答し、主に身体のために良いと説明したり、調理法を工夫するなどの対処法を三地区ともっているが、T地区では一口でも必ず食べさせるとする傾向が他地区よりかなり強くみられ、親の関心の強さがうかがわれた。

箸の持ち方については、「手をとって教える」がO地

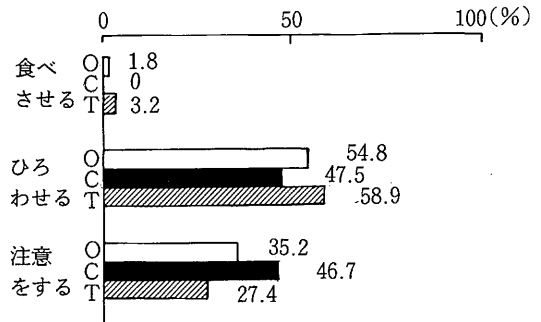


図6 床や畳にこぼした場合

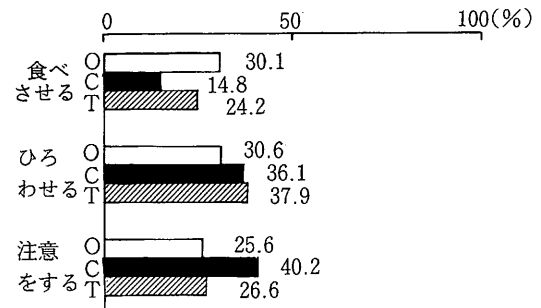


図7 食卓の上にこぼした場合

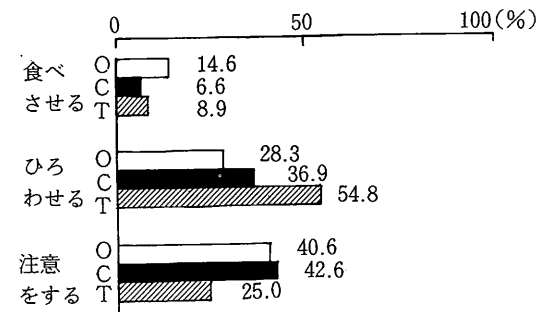


図8 口のまわりや衣服にこぼした場合

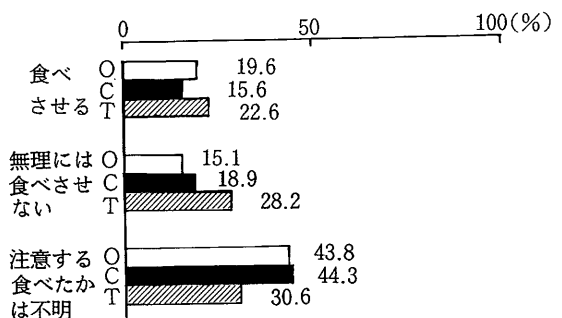


図9 食べ残した場合

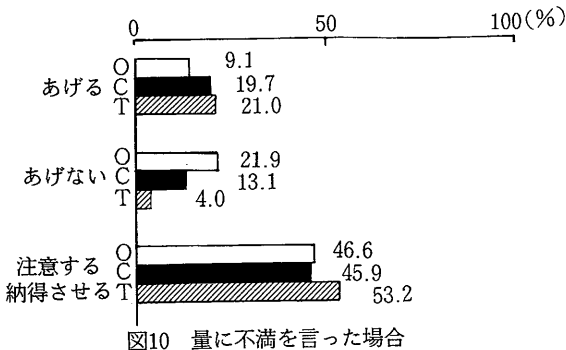


図10 量に不満を言った場合

区46.1%, C地区45.8%, T地区54.8%と各地区ともほぼ同数を占め、「親を見習わせる」O地区22.4%, C地区25.0%, T地区26.6%,「言葉で説明する」O地区25.6%, C地区16.7%, T地区18.5%といった順になり,「注意しない」は, O地区5.0%, C地区5.8%, T地区5.6%と少ない。ここでは, 近年スプーンやフォークの使用により, 箸の使えない子どもたちが増えていると言われるが日本の伝統的作用である「箸」の使い方は, 特別の注意が払われているとはいえないにせよ, 母親たちは何らかの方法で子どもに教えようとしている意図がうかがわれる。地区別にみると, T地区は,「手をとって教える」こと, O地区は,「言葉で説明する」が他地区に比べてわずかながらも多くなっている。

図11は, 食事の躰についての程度を示したものである。各地区とも,「かなり心がけている」が50%以上を占め, 子どもの躰には関心が高いことを示唆している。ここでも注目されるのはやはりT地区であり,「きびしい方である」とあわせると70.2%となり, O地区の56.3%, C地区の60.7%に対しては高い値を占めていることになる。

では, その躰の主体者との関係をみてみると, 私(母親)がO地区73.1%, C地区77.9%, T地区78.2%と, ほとんどの家庭で母親が躰の主導権をもっている。主人(父親)は, O地区11.0%, C地区8.2%, T地区17.7%とT地区が多く, 母(祖母)は, O地区5.9%, C地区2.5%, T地区0%とO地区にやや多くみられる。父(祖父)になると, 各地区ともわずか1%にも満たない。これは, 各地区の家族構成の違い, すなわち, T地区では, 90%以上が核家族であるのに対し, O地区では, 64.4%, C地区では56.6%といったことの影響が考えられる。O地区では, 祖父母との同居が多く, 母親の就業率の高いこととあわせ, 子どもの躰にも祖母が必然的に関わってくるものと思われる。そして, T地区では, 子どもの

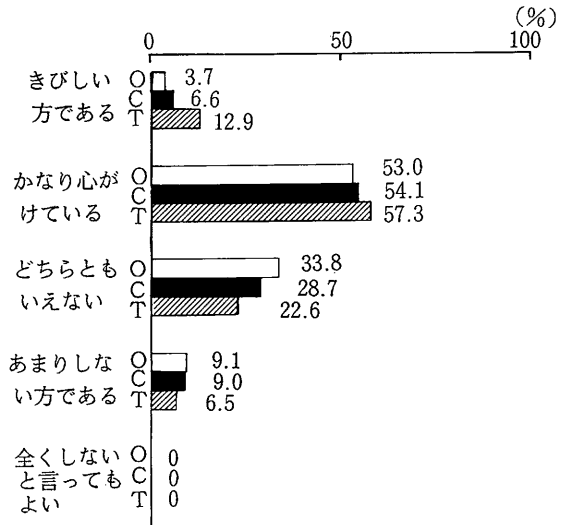


図11 躰の程度

躰や教育も夫婦の協力が必要となり, 特に母親は子どもの躰の中心者とならざるをえず, よりきびしい方向へ目が向けられていくと考えられる。

以上, 食行動の集計結果を要約すると, O地区では, 母親の就業率が高いことや家族の人数が多いことに関連し, 食事にさほど時間をかけてはいない。しかし, 食べることを大切にすると同時に, 古くからの食に対しての伝統的意義や迷信などが少なくなったとは言え日常生活の中に今だに残されているといえる。子どもの躰についても, 両親や家族の姿を見ながら自然に躰られていることが感じられる。C地区では, 古きものを大事にし, 新しいものを取り入れる意図が強く感じられ, 子どもの食の躰に対しても, 神や食事を作ってくれた人たちに感謝する気持や, きちんとした態度で食事を行なうということを意識的に心がけていると言える。T地区では, 3地区中最も子どもの躰に関してきびしい面がみられる。一家庭の子ども的人数は大都市に近づくにつれ減少傾向がみられるが, その中で先にも述べたように, 核家族の多いT地区では, 母親が子どもの躰の主体となる傾向が最も強いが, 情報過多のもたらす将来への不安や期待も子どもに対応する母親の意識, 行動を規定する要因の1つといえよう。

2. 伝統的な食習慣

つぎに, 伝統的な食習慣について, 行事食の取り扱い方, 行事食の由来の伝承度, 祀りものに対する供え物の仕方と意識, 食事と故事との係わり, 等々の点から, 地

域の特色や傾向を主に検討する。

初めに行事食に関しては、任意にあげた行事食9項目の中で、特に注目すべき地域差や傾向について述べる。

まず図12の〈お正月〉については、行事食を「必ず作る」割合は、O地区84.9%、C地区93.4%、T地区86.4%で、C地区が最も高い比率を示している。反対に、行事食を「全く作らない」割合については全体的に低いが、O地区0.5%、C地区0%、T地区2.4%で、T地区が高い。行事食を作らない理由としては、家族の分散や縮小化などによる行事意識の低下、あるいは帰省や旅行などによる人的不在が考えられるが、各地区の行事食を「作る」割合が非常に高いこと、更に任意にあげた他の行事の中で、最も地域差が小さいこと、等々から、〈お正月〉が日本古来の伝統行事及び行事食として、揺ぎない地歩を歩めていることがわかる。

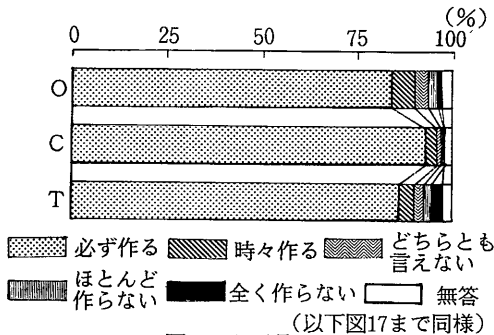


図12 お正月

次に図13の〈ひなまつり〉〈七五三〉〈子どもの日〉については、これらはどれも子どものための行事であり、更に〈子どもの日〉に古来の「端午の節句」を重ねると、各行事とも〈お正月〉同様、日本の伝統行事と言えるものである。しかし行事食を「必ず作る」割合については、〈ひなまつり〉・O地区37.5%、C地区27.9%、T地区53.1%、〈七五三〉・O地区30.6%、C地区36.9%、T地区53.2%、〈子どもの日〉・O地区32.4%、C地区22.1%、T地区46.0%で、各行事ともT地区が50%前後の高い比率を示しているが、O・C地区では何れも30%前後に留まっている。この数値的な差については、T地区の方がO・C地区に比べて、情報や流通の面で著しい商業主義の影響を受け易いためかと考えられるが、一方のO・C地区の低い比率は、これら三行事が伝統行事とは言っても、行事食としては特に重視されてはいないことを示すものである。但しこれについては、〈ひなまつり〉や〈七五三〉が国民の祝日として、特に制定されていない

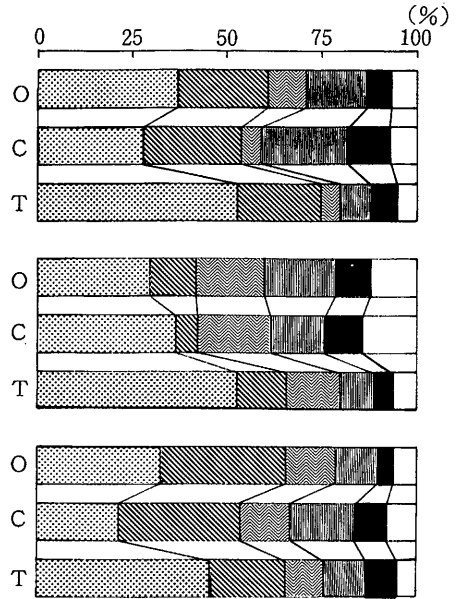


図13 ひなまつり(上)・七五三(中)・子どもの日(下)

こと、更に〈子どもの日〉は、祝日としての歴史が未だ浅いこと、等々をその理由として考慮すべきであろう。

また図14の〈お彼岸〉〈お盆〉については、これらは何れも仏事、仏参であるが、行事食を「必ず作る」割合は、〈お彼岸〉・O地区42.9%、C地区43.4%、T地区18.5%、〈お盆〉・O地区52.5%、C地区41.0%、T地区16.1%で、各行事ともO・C地区に比べて、T地区の比率が低いことがわかる。しかしこれは、T地区での仏壇の保有率が15.3% (図19参照) であることから推測できるように、核家族化による若い世代を中心としたT地区では、他地区に比べ仏事、仏参との係わりが非常に少ないことが主な原因と思われる。従って以上のことから、これら二行事については、O・C地区では概ね存続するであろうが、T地区では大変伝承されにくい傾向にあると言える。

図15の〈十五夜〉については、これも日本古来の伝統行事であるが、行事食を「必ず作る」割合はO地区31.5%、C地区24.6%、T地区10.5%で、都市化が進む程、比率は低くなっている。これは〈十五夜〉が元来収穫儀礼の一つであり、同時に「観月を愉しむ」という目的をもつことから、地域の生産様式や住環境等が多分に影響していると考えられる。しかし一方、農耕と密接な係わりをもつと思われるO地区や、それに準ずるC地区でも

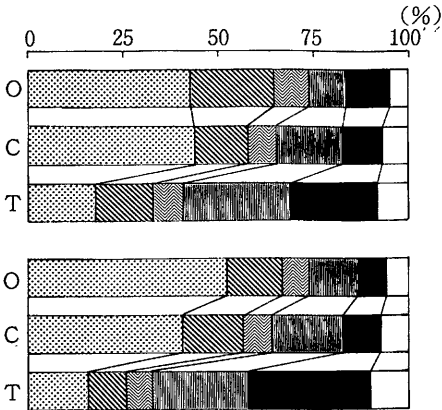


図14 お彼岸(上)・お盆(下)

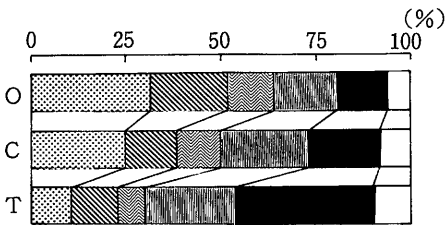


図15 十五夜

特に高い比率は示されていない。つまりこれらの点から＜十五夜＞は、何れの地域においても、行事及び行事食として特に重視されていないことになる。

図16の＜クリスマス＞については、これは元来キリスト教最大の行事で、我国にとっては外来文化であるが、行事食を「必ず作る」割合はO地区58.0%、C地区67.2%、T地区79.1%で各地区とも高い比率を示している。また更にその比率は、先の＜ひなまつり＞等と同様、都市化が進む程増加しており、T地区での伸びは、情報や流通の発達と深く係わっていることがわかる。これに対して、「全く作らない」はO地区1.4%、C地区0%、T地区3.2%で何れも低く、これによっても＜クリスマス＞が、我国においても慣行として定着していることがわかる。しかし、「必ず作る」家々が全てキリストンというわけでもないことから、何れの地域においても単に商業主義に煽られて盛大化したものと推察される。

図17の＜誕生日＞については、行事食を「必ず作る」割合は、O地区68.9%、C地区83.6%、T地区89.5%で各地区とも大変高い比率を示している。しかし行事とし

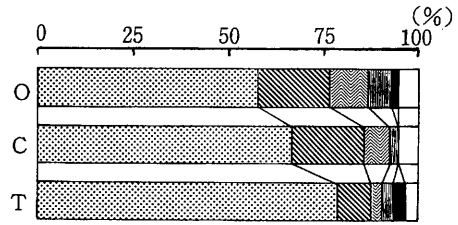


図16 クリスマス

ての＜誕生日＞については、元来日本では、お正月を迎えることで歳をとるという習慣があり、一部上層階級、例えば「徳川實紀」によれば、将軍の誕生日には、家来に餅や酒を振る舞ったり、根津権現や稲荷神社に昆布や干鯛、酒を寄進するなど、また生母や老中より献上品を受ける、等々の年中行事としての記録もあるが、一般的には「生まれた日」に対する意識はあっても、年中行事や行事食として取り扱った様子は特に見られない。むしろ＜七五三＞や＜還暦＞等の人間の通過儀礼の方に重点が置かれていたのではないかと考えられる。従って現代のような＜誕生日＞は歴史が浅く、＜クリスマス＞等と同様、著しい商業主義化や欧米の影響によって盛大化したものと言えよう。

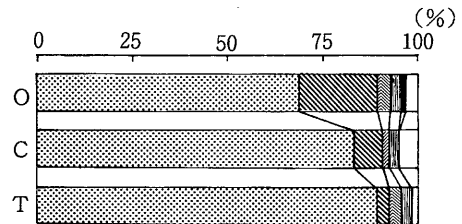


図17 誕生日

また＜その他＞として、O地区では、まつり、恵比寿講、命日、十三夜、天神様、結婚記念日、C地区では、まつり、命日、恵比寿講、結婚記念日、節分、父・母の日、T地区では、結婚記念日、宮詣り等の祝い事があげられているが、O・C地区では命日や結婚記念日を除けば、何れも共同体祭祀による土俗、民間信仰を基盤としており、これに対してT地区では、個人や家族を主とする行事が中心となっている。

以上のことから、行事食を「必ず作る」割合で、各地区毎に順位づけると、O地区では、1 お正月、2 誕生日、3 クリスマス、4 お盆、5 お彼岸、6 ひなまつり、7 子

どもの日、8十五夜、9七五三、C地区では、1お正月、2誕生日、3クリスマス、4お彼岸、5お盆、6七五三、7ひなまつり、8十五夜、9子どもの日、T地区では、1誕生日、2お正月、3クリスマス、4七五三、5ひなまつり、6子どもの日、7お彼岸、8お盆、9十五夜、となる。これによれば、O・C地区では日本古来の伝統行事は、外来文化に押され気味ではあるが、辛うじて上位を占めており、全体的にはそれらとの混淆において伝承されていると言える。しかしこれに対してT地区では、外来文化が上位を占め、日本古来の伝統行事はそれに続く形となっている。また先にも述べたが、O・C地区では行事、行事食の多くが共同体祭祀を基盤としているのに対し、T地区においては家族や個人を主とした行事形態が目立つことも大きな特色である。更に＜クリスマス＞や＜誕生日＞の圧倒的な進出や、T地区での＜ひなまつり＞＜七五三＞＜子どもの日＞などの伸びは、戦後の著しい商業主義化を反映したものであり、同時に日本古来の食文化が、欧米的影響のもとに変容していることの表われと言える。

次に図18は、各地区における行事、行事食の由来の伝承度を表わすものであるが、これは行事食全般について、口頭でどの程度伝承しているかをみるものであり、従って前述の各行事食の項とは伝承の度合を異にする場合があることを、予めことわっておかなければならない。これによれば、行事食の由来について「たいてい話す」のは、O地区では48.9%、C地区では53.3%、T地区では62.9%で、都市化とともに比率は増えている。つまりT地区において最も伝承されていることになる。また「たいてい話す」と「ほとんど話さない」を対比してみると、O地区48.9:38.4、C地区53.3:36.9、T地区62.9:31.5で、C・T地区では1.4~2倍の比になるが、O地区では僅か1.2倍程度である。従って現代のように家庭以外から得られる情報量の豊かさを考えれば、C・T地区では行事、行事食の由来は概ね伝承されるであろうが、O地区では「たいてい話す」と「ほとんど話さない」の数値が接近しているため、将来両者の関係が同等、更には逆転の可能性も有り得るわけで、その意味において行事食の由来は伝承されにくい状況にあると言える。

さて祀りものに対する供え物の仕方と意識については、先に地域による祭祀形態の違いについて少々触れたが、ここでは具体的な祀りものと食習慣の係わり、特に供え物をする時の意識について述べる。

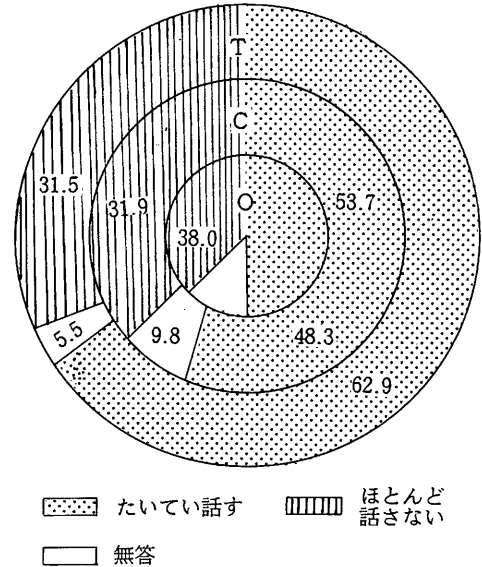


図18 行事食の由来の伝承例

まず図19は、各地区の神棚、仏壇を含む祀りものの保有率について表わすものだが、O地区では81.7%、C地区では80.4%、T地区では28.2%で、O・C地区に対するT地区の低比率が目立つ。しかしこれら祀りものの地域差については、O・C地区では多くの人々が先祖代々の土地に住み、敷地内あるいは近くに墓や祠、社を祀るなど神仏との係わりが密接であるのに対して、T地区ではほとんどが核家族化による若い世代を中心としており、仏事とは特に深いつながりをもたないことが主な原因と考えられる。また更に、神棚、仏壇以外の祀りものとして、O地区では恵比寿や大黒等20種、C地区では山神やお釈迦様等11種、T地区では稲荷等3種あげられているが、何れも土俗、民間信仰に根ざすものばかりで、種類、

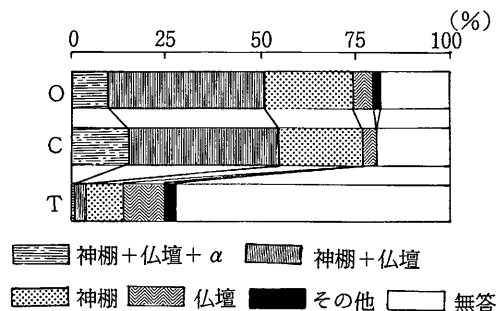
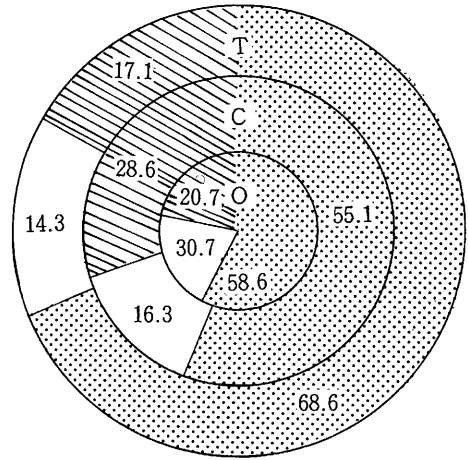


図19 祀りものの保有率

数ともにO地区が圧倒的である。そしてこれら多数の神々は、長い歴史の中で人々と密接に係わってきたことがわかる。

次に、これらの神仏に対する供え物の仕方やその時の意識については、図20、21の通りだが、供え物の仕方に、毎日や時々、行事の日や旬の頃等の違いはあるが、どの地区においても、何らかの形で供え物をしていることがわかる。例えばO地区では90.0%、C地区では93.9%、T地区では91.4%の家々で供え物をしていることになる。また供え物をする時の意識、つまりその理由として三地区とも「神や仏への感謝と家の幸福を願って」が最も多く、神仏への敬謙な祈りが伺える。更にこれらの意識は、子どもにも供え物をさせることで伝承されており、図22のO地区58.6%、C地区55.1%、T地区68.6%という比率からもわかるように、祀りもののある家では、その信仰心は概ね子どもたちにも浸透していると考えられる。

さて食事と故事については、食事と関係のある故事で任意に用意したものは14項目であるが、「既知で且つ子どもに伝承したもの」、すなわち現在までに伝承されたもので、更に次の世代に伝承したものについては、「寝ころんで物を食べたり、食べてすぐに横になると牛にな



供えさせる 供えさせない
無答

図22 子どもと供え物

る」(O地区・既知97.0:伝承81.2, 以下同様に、C地区98.4:70.5, T地区97.6:66.1),「箸から箸で食べ物を受け渡すな」(O地区89.0:66.9, C地区97.5:66.4, T地区91.2:52.1)が大変高い比率を示しており、これらは各地区で、伝承される可能性が最も高い故事と言える。またこの他に、「こぼした飯粒は拾え、さもないと目がつぶれる」(O地区21.1:5.3, C地区42.6:12.3, T地区65.3:29.8)や「一杓子で茶碗一杯にご飯を盛るな」(O地区30.1:4.5, C地区50.0:2.5, T地区38.7:0.8)等のように、「既知」の点では特に高い比率ではないが、現時点までにある程度伝承されていて、今後下降線を辿るもの、あるいは「ご飯を食べながら背伸びをすると、ご飯がお腹に入らず背中の方に入って死ぬ」(O地区7.5:3.0, C地区4.1:0.8, T地区10.5:2.4)や「肘をついてご飯を食べると地震がくる」(O地区3.8:1.5, C地区7.4:2.5, T地区4.0:0.8)のように、現在までの伝承率が10%前後、または未満で、今後は更に下降していくもの、また「食器の口の欠けたものを食膳に出すと客が不幸になる、女はお産が重くなる」(O地区7.5:1.5, C地区4.1:0, T地区5.0:0)や「左手でご飯を盛るな」(O地区12.8:2.3, C地区5.7:0, T地区9.7:0)等のように現時点で消滅、あるいは消滅しかけているもの等々、故事によって伝承の度合いが異なっていることがわかる。これを故事のもつ意味や目的によ

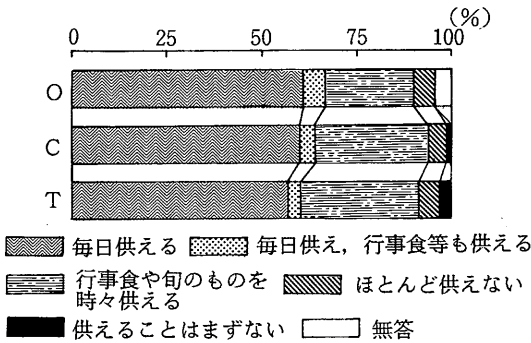


図20 供え物の仕方

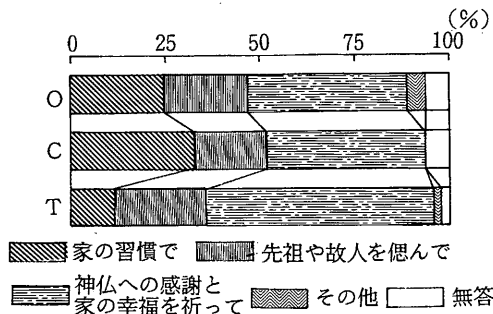


図21 供え物をする時の意識

て、「宗教的禁忌」「社会化への導入」「外面的態度の矯正」に分類し検討すると、三地区ともに「外面的態度の矯正」を主とした故事が重視され、「宗教的禁忌」や「社会化への導入」に関する故事は、やや後退していることがわかる。

以上の集計結果から、各地区における主な特色は、O・C地区では、お正月やお彼岸、お盆のような土俗、民間信仰を基盤とした日本古来の行事や行事食に重きがおかれ、一方ではクリスマス等の外来文化と融和しながら存続していること、これに対してT地区では「伝統」というよりも商業的色彩の濃い行事、例えばひなまつりや七五三などが盛大化していることであろう。また「伝承する」ということについても、O地区よりはC地区、C地区よりはT地区という具合に意識は高くなっている。つまりこの点では「伝統」と「意識」は、相反していることになる。このように日本の伝統的な食習慣は、戦後の商業主義の発達や近代文化の導入によって、それ自体が大きく変容していること、特に＜行事食＞などはその影響が大きく、行事食のもつ原初的な意味について伝承されにくい傾向があることは見逃せない。また故事との係わりについては、全体的に「宗教的禁忌」や「社会化への導入」を意味するものより、「外面的態度の矯正」を目的としたものが重視されている。従ってこれら一連の事柄は、日本の食文化の伝統的意義の衰退を表わすものと考えられる。

Ⅲ おわりに

いわゆる膳は、所属する社会において、一人前の社会人にしあげられることであり、日常生活における基本的な望ましい価値の習得と行動の習慣化の体得を目ざして行なわれる。従って、生きて生活する社会の生活様式や文化、社会経済的状况により影響を受けるものである。

我々は、食を媒介とした膳としての子どもの食行動や、日本に伝えられる様々な行事を通しての食習慣の状況の中から、食文化の現代的状況を知ろうとした。

食行動では、食を通しての自立をめざした膳において地域で方法や意識に顕著な差の認められるものは少ないが、その差異は、居住状況、家族構成などによって影響を受けることがわかった。三地域の日常生活における具体的な子どもの食に関する膳は、かなり都市型であるといえる。40年前²⁾には、物質的、経済的条件や宗教的背景の影響を受け、外面的態度矯正、宗教的禁忌が膳の中

心をなしていたが、現代においては物質的、経済的条件の向上により、栄養的、保健、衛生的側面の要件を重視している傾向がみられる。また情報伝達の同時化というべき情報網の発達や物質の流通機構の進歩により、知識や物質に地域差がなくなり、全体的に知識的、意図的な膳が行なわれていると考えられる。地域社会における文化、伝統の価値基準の中で、無意図的に習慣的に行なわれていた膳の姿とは異なり、膳の主体者となる親(大人)の意識的な努力の姿が推察されるが、知識に振り回されることなく、現実にいる子どもの発達の姿をあるがままに見つめ援助することを忘れてはならないだろう。膳る者と膳られる者の基本的な信頼関係、情緒的な結合なくしては望ましい膳は行なわれず、人間形成にも問題を残すものと思われる。

「毎年同じ暦時に、同じ様式の習慣的な営みがくりかえされるような伝承的行事」を年中行事と言い、日常とは異なるこのような特別の日を「ハレ」の日と呼ぶが、その日には労働を休み、祭りをしたり、又特別な食物をつくったりする。節句の行事や宗教的な行事、農耕を中心とする農耕の行事、通過儀礼に伴う行事など様々な行事があるがそれらの行事に供なう習俗的、伝統的食習慣を通して、自然や文化と人間の交流の中における親から子への伝承の実態を把握した。

行事食は、神や人形に供えられるが、その後の「共食」は単なる供養ではなく、その儀礼を通して自然や神、人形等との一体感、共同体との同一化を促し、自己確認にもとづく人格の形成にとって重要な意義を有していると思われる。今回の調査において農村や地方都市では、お正月、盆行事など共同体祭礼に関わる行事及び行事食の伝承が大都市よりも行なわれる事が多く、大都市においては、家族を主とする比較的新しい子どもを中心とした行事及び行事食、例えば誕生日、クリスマス、子どもの日、七五三などが盛んで、生活様式、家族構成、宗教意識、共同体意識の各地域における傾向と関連性を持っていることがわかった。全体的に伝統的食習慣の精神的意義の伝承及び膳は薄くなり、形骸化されつつあるが、伝統的習慣あるいは故事を通して、子どもの文化的、精神的土壌を肥沃にし、自然、人間、物のつながりを無意識的に感受し得る環境の必要性を感じる。孤食、拒食、過食、異食等、食に関わる精神的な疾病が現代病として華々しく扱われるが、食の技術的、社会的変化と食のあり方を通して、今後、人間形成を見つめ直していかなければな

らない。

この調査研究を進めるにあたって、調査にご協力いただいた小鹿野幼稚園、三田川幼稚園、秩父幼稚園、大東文化附属幼稚園、まるやま幼稚園の皆様から感謝致します。また、ご指導いただきました山内昭道教授、茨木竹二助教授にお礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 山内昭道，茨木竹二・子どもの食生活と躰についての総合的研究(1)，東京家政大学生生活科学研究所報告第7集 1984
- 2) 茨木竹二，川合貞子，千田真規子，猪俣美知子，斉藤尚子，武石仁美，野崎千穂子，福田啓子，村木由紀子；子どもの食生活と躰についての総合的研究(2)，東京家政大学生生活科学研究所報告第8集 1985

- 3) 川合貞子，千田真規子，猪俣美知子，上里千穂子，斉藤尚子，武石仁美，福田啓子，村木由紀子；子どもの食生活と躰についての総合的研究(3)，東京家政大学生生活科学研究所報告 1986
- 4) 浅見清一郎；秩父，祭りと民間信仰 有峰書店 1970
- 5) 石毛直道；人間，食べもの，文化，平凡社 1980
- 6) 西角井正慶；年中行事辞典 東京堂出版 1978
- 7) 黒板勝美国史大系編集会；新訂増補・国史大系・徳川實紀・第七篇 吉川弘文館 1982
- 8) 大島曉雄他編；民俗探訪事典 山川出版社 1983
- 9) 柳田国男；子ども風土記 岩波書店 1976
- 10) 姫田忠義；子育ての民俗をたずねて 柏樹社 1983
- 11) 我妻洋，原ひろ子；しつけ 弘文堂 1974